蒔絵

蒔絵は、漆器に用いられる装飾技法で、塗りたての柔らかい漆の上に金粉などの金属粉を塗るものである。1955 年に重要無形文化財に指定された。

蒔絵の歴史は古く、8 世紀頃には主に社会的・宗教的な権力者のメンバーのために用いられていた。特に 18 世紀の商業ブーム、19 世紀から 20 世紀にかけての国際交流の進展により、漆器が他の顧客層にも普及するにつれ、技法やデザインは多様化し、進化を遂げた。

蒔絵とは、固まった漆の表面に、濡れた漆で形を描き、その上に金属粉を蒔いて作られる。塗りたての漆に粉が付着し、絵柄が出来上がる。蒔絵は技法によって、下地漆の中に埋め込むもの、表面と同じ高さのもの、高浮き彫りのものなどがある。

蒔絵師はその芸術を多様化するために、さまざまな方法を開発してきた。金や銀だけでなく、他の金属や合金を用いて様々な色を表現することもある。また、粒の大きさが異なる粉を使うことで、様々な質感や光沢に変化を持たせることもできる。蒔絵に卵殻（卵殻を砕いたもので装飾する）や螺鈿（螺鈿細工）を組み合わせることで、純白の輝きや虹色の輝きを加えることもできる。石川県立美術館には、これらの技法を組み合わせた漆器が数多く展示されている。